(1) 九条姫の最後

昔、天神堂の耳取の地に「九丈沼」と呼ばれる泥深い大きな沼があり、大昔の頃から此の沼の深さを誰一人として極めた人はなく、唯(ただ)、東根の「潟尻の沼」に手杵(てきね)を投げ入れておくと、翌日には此の九丈沼に浮いているとのみ、長く里人達に語り継がれて来た沼である。どことなく薄気味悪く物の怪を感ずる此の沼は、その昔、故あって身の寄せ所を失った「九条の姫」と呼ばれる、京都の由緒の深い家柄に育った姫君が一人淋しく草深い出羽(いでわ)に下り、ふとした所縁(ゆかり)を求めて、此の地の百姓　某の養育を受けていたものと伝えられている。然し此の姫は長い歳月を過ごせば過ごす程に、都で暮らした在りし日を懐かしく思われて切なく、一人これを嘆き悲しむ余り、遂に此の沼に身投げして哀れな最後を遂げたと云う……。

「九丈沼」その名の起こりも、此の九条の姫の悲しい物語に纏(まつわ)るものと云う……。